

2021 年度 個人研究実績・成果報告書

2022 年 4 月 22 日

所属	商経学部	職名	教授	氏名	荒川敏彦
研究課題	マックス・ヴェーバー研究				
研究キーワード	Lebensführung	当年度計画に対する達成度	2.順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が達成できた		
関連するSDGs項目	8.働きがいも経済成長も	該当なし	該当なし	該当なし	

1. 研究成果の概要

論文「マックス・ヴェーバーの『倫理』論文における内面的孤独化と『天路歷程』の口絵」『千葉商大紀要』では、マックス・ヴェーバーの『倫理』論文において重要な位置を占めるジョン・パニヤン『天路歷程』の解釈をめぐり、その岩波文庫版（大塚久雄訳）の表紙における口絵の活用が示す問題を扱った。ヴェーバーの『倫理』において、平信徒にたいする二重予定説の作用として指摘された内面的孤独化の典型とされたのは、『天路歷程』「第一部」の主人公が巡礼に立つ場面であった。大塚久雄訳の岩波文庫版『倫理』では、そのカバーデザインに『天路歷程』の原書にあった口絵が採用されている。しかしそれが『天路歷程』の「第二部」であることは、『倫理』の内容と大きく齟齬を来している。二重予定説の作用による内面的孤独化を表現しようとするなら、内容に沿って、『天路歷程』「第一部」の口絵（主人公が単独で巡礼している絵）がふさわしい。しかしカバーに採用された「第二部」の口絵は、「第一部」の主人公が天の都に到着して後、回心した家族が巡礼に出る場面が描かれており、『倫理』の内容とほとんど関連がない。二つの口絵を比較することで「増大」のモチーフ（子孫や信仰共同体の増大と、資本の増加）を読み込んで新たな解釈を展開することも可能かもしれないが、『倫理』の中心主題ではない。岩波文庫版『倫理』はもっとも流布している日本語訳であり、その表紙が『倫理』の読者の解釈を方向づけることは十分考えられるため、注意すべきである。

論文「墓参における伝統の創造と現世利益——東京都 23 区民の生活意識調査から」『千葉商大紀要』では、墓参りが供養とは異なる現世利益的な祈願の機会となっていることに注目し、関連する意識や行為について、主として 2020 年に実施した調査の量的データをもとに検討した。現代、代行サービスを利用してでも墓参を欠かすまいとする心性や、その一方で伝統的な墓参の時期としての盆や彼岸についてネットでしきりに検索して調べられている状況は、墓参が伝統として継続される一方で、その内実の変容をうかがわせる。墓参りににおける自分や家族のためになされる祈願行為は、教団との関わりで習慣づけられているものではなく、「伝統」として観念されている墓参りをくり返すなかで、家族やメディアなどの影響を受けつつ習慣化した文化的実践と言える。その実践は、墓参という日常から区別される非日常世界に、現世利益という日常の思いを持ち込みながら、日常と非日常とを融合させている場を構成している。墓参祈願は、自己ないし家族という狭い範囲での現世利益を求める行為である。一定の共同性において形成された「伝統」的行為が周期的に反復されることで、あたかも安定して継承されているかに見える事態を明らかにし、その内的構造の一端を解明した。

報告「時間で区切られ駆り立てられる生活態度——『プロ倫』における Berufsmensch と「時間の分割」」では、ヴェーバーが『プロ倫』で述べた Berufsmensch の形成が、時間の分割と密接に結びついていたことを指摘した。ヴェーバーは、「方法的 Lebensführung」の形成にとって、時間分割と（不断の）自己統制とが重要な役割を果たしたと指摘している。中世以来、修道院においては夜間も定期的に鐘が鳴らされており、一日中鐘の音が絶えることはない。また享楽を拒否し、世俗の要請や誘惑を拒否する自己統制も絶え間なく続けねばならない。絶え間なく鳴り響く鐘の音は、修道士たちにいまは何をすべき時か、教えてくれるのである。他方で、世俗に生きる平信徒は、自然条件に依存して仕事をする農村生活を典型として——ただし都市の職人も

無限の欲望に基づいた生産や生産性の向上などは考えられていないから大差はないが——、時間で区切って仕事をしてきたわけではない中世から近世の平信徒たちにとって、時間で自己の身体活動を管理するというのは特異なことであつたらう。その特異なことへと駆り立てる衝動・駆動力 (Antrieb) の宗教教的側面の現れこそ信徒が救済の証を求めた確証の活動であり、それを通して宗教的に形成された存在が **Berufsmensch** なのである。また、教会の鐘に対抗するかたちで都市も市庁舎などに鐘を設置し、世俗の集会や仕事の開始と終了の合図などに使用するようになっていく。教会権力と都市圏力との、時間による支配権の争いである。換言すれば、都市の内部は、祈りのための教会の時間と自治や仕事のための世俗の時間という、異なる質をもった時間を区切るための鐘の音が重層的にこだまする生活空間であつた。こうして「時間分割」が宗教的にも世俗的に拡大・展開される中で、まさに宗教的意味と世俗的意味の二重性を帯びた **Berufsmensch** (天職人=職業人) が形成されていったと考えられる。

2. 著書・論文・学会発表等 (査読の有無及び海外研究機関等の研究者との国際共著論文がある場合は必ず記載)

【論文 (査読あり)】

【著書・論文 (査読なし)】

「マックス・ヴェーバーの『倫理』論文における内面的孤独化と『天路歷程』の口絵」『千葉商大紀要』第 59 巻 2 号、1-13 頁。

「墓参における伝統の創造と現世利益——東京都 23 区民の生活意識調査から」『千葉商大紀要』第 59 巻 3 号、1-20 頁。

【学会発表等】

「時間で区切られ駆り立てられる生活態度——『プロ倫』における **Berufsmensch** と「時間の分割」」第 13 回ヴェーバー研究会 21、研究報告、2022 年 3 月 (Zoom)

3. 主な経費

4. その他の特筆すべき事項 (表彰、研究資金の受入状況等)

【科学研究費】

基盤研究(B): 2018 年度~2022 年度、研究代表者、課題「現代日本社会における呪術的意識と行為をめぐる秩序化のダイナミズムの解明」(18H00929)